

「学制」初期の教員の資質能力に関する研究の課題：
近世・近代の移行期に着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007365

「学制」初期の教員の資質能力に関する研究の課題

—近世・近代の移行期に着目して—

松尾 由希子*

Research Issue of the Teacher's Qualifications and Abilities in the Beginning of the Era of the Educational System (Gakusei):

Focusing on the Transition of the Early Modern (Kinsei) Period to the Modern (Kindai) Period

Yukiko Matsuo

Abstract

This study explores the previous studies and research issues concerning the teacher's qualifications and abilities in the beginning of the era of the "Gakusei", Meiji period, namely the transition from the early modern (Kinsei) to the Modern (Kindai). Most of the previous research relating to the teacher's qualifications and abilities from the beginning of the "Gakusei" period until the Kinsei period discussed the problems of teaching certificates and teacher's learning experience. However, Hanai Makoto pointed out that if we examine teacher's qualifications and abilities in that era, it is important to discuss the teacher's learning experiences of western studies (Yougaku) as well as learning experiences of the studies of the Chinese classics (Kangaku). In addition to Hanai's discussion, this paper places value on the various factors that support the situation of the teacher's learning, since usually the learning activities are supported by various factors such as social structures, socio-cultural and historical local context and learning networks of teachers.

The following points are critical to the study of the teacher's qualifications and abilities in the era of transition between Kinsei to Kindai: (1) The teacher's learning of the Yougaku and local context; (2) Contents and conditions of the teachers' learning about both Yougaku and Kangaku; and (3) Re-evaluation of the teacher's learning experience of Kangaku during the Kinsei period.

キーワード：近世・近代の移行期、教員の資質能力、「学制」、漢学、洋学

はじめに

近年、教員の資質能力について関心が高まっている。教員の資質能力向上を目指して、大学の教職課程のカリキュラムや免許制度の改革が進んでいる¹。具体的には、教職大学院の設置、教員免許更新講習の実施、教職実践演習の新設、教員養成スタンダードの作成などがあげられる。教員として必要な資質とはどのようなものか。それをどのように評価していくか、という点が議論されている。本稿の目的は、近代学校が成立した「学制」初期の教員の資質能力に関わる先行研究の成果を整理することを通して、残されている課題を示すことにある。教員の資質能力について、歴史から得られる知見は、今後の教員養成、職能形成のあり方を考えていくための基礎的な材料になる。

「学制」初期の教員の資質能力を検討するために、近世・近代を通じた視点に着目したい。本稿で使用する「近世・近代」という言葉の時期は、特に注意を付記しない場合、幕末から明治10年(1877)までとする。本文で詳しく述べるが、教員養成のシステムが十

分に整っていないこの時期において、「学制」初期の教員の資質能力は近世までに培った学業にあると考えられる。「学制」初期の教員の資質能力を検討していくことを通して、近世の学習履歴の再評価をめざしている。また、近世の学習履歴を確認すると同時に、近代に対応した学問の習得についても考えたい。

本稿を執筆するにあたり、花井信氏の著作『山峡の学校史』²から示唆を得た。このため、特に同上の著作を引用している。

1 先行研究にみる「学制」初期の教員の資質能力

「学制」初期の教員の資質能力に関連する先行研究について(1)教員免許取得との関連、(2)近世までの学習履歴との関連、(3)近世・近代を通じた学習履歴との関連の3つに分類し、それぞれの内容について整理する。

(1) 教員免許取得との関連

明治5年(1872)の「学制」制定により、日本では近代学校が成立し、教員という専門職が発生した。

「学制」によると、教員は資格を必要としたが³、実際は明治半ばくらいまで教員免許を取得していない無

*大学教育センター

資格教員の多い時代が続いた⁴。「学制」初期の教員に関する研究は、主に教員免許取得の面から制度史として検討されてきた。例えば、陣内靖彦氏は、明治7年(1874)に文部省が原則として師範学校卒業を教員の資格と定めながらも、府知事県令が授与する教員免許状も認めたことを指摘する⁵。牧昌見氏は、「学制」初期において、教員資格を得られる師範学校や中学校⁶の数が少なかったために、結果として十分な教員数を確保できなかった点を指摘した⁷。そのため、明治7年に有資格教員を緊急に増やすために行なった検定制度についても言及している。

以上に代表されるように「学制」初期の教員に関する研究は、教員免許状取得の面から検討されてきた。資質能力は教員免許状で示され、資質能力の内容は師範学校などのカリキュラムにあると考えられる。一方で、陣内氏も指摘しているように当時多数存在したのは、師範学校などを経っていない無資格教員だったが、その資質能力の内容については十分に検討されてこなかった。教員免許状取得以前から、学校で教育を行っていた多数の無資格教員の実態を考えると、無資格教員の資質についても検討する必要がある。

(2) 近世までの学習履歴との関連

教員履歴を研究題材とし、教員の近世までの学習履歴に着目したのは、仲新氏ら、大橋昌平氏である。

仲氏らは、明治18年(1885)までに作成された愛知県内の1395枚の教員履歴書を対象に、身分、出身地域、学校歴、学習歴などの項目にわけて「学制」初期の教員の特徴を分析した。分析対象となった教員のほとんどが有資格教員である。愛知県では、明治6年(1873)12月に愛知県養成学校を設置したが、「学制」実施当初は、「学制」が示した近代の教科を教えらるる教員を確保できず、養成学校設置後もすべての教員が通うことはなく、通ったとしても短期間だった。したがって、仲氏らは「明治前期の教員の資質・教養は、教員養成学校の教育以外の学業、すなわち旧学歴にその多くを負っているとみななければならない」⁸と述べて、「学制」初期の教員の近世における学習履歴⁹を評価した。教員の中で漢学を履修した者は多かった。国学、和学などを履修している者は全体の22.8パーセント、数学は全体の19.8パーセントであったが、漢学を履修した教員は94.3パーセント(675名中637名の履修)であった¹⁰。したがって、この時期の教員の資質能力として、特に漢学を重要視していたとみることができる。全国的な傾向として、当該期における教員中に士族出身者のしめる割合は高く、愛知県の教員も約半分が士族出身者であった¹¹。近世において、士族は藩校に通い、漢学を学んでいた。士族の出身でない教員も私塾などで漢学を学んでいたと考えられる。

大橋氏は、神奈川県の日田市地区の勸能学校(小学校)の教員だった6人の経歴や教員になった経緯を分析した¹²。教員の任免の責務を負っていたのは、学校世話役だった。彼らは当該地域で学務委員を務め、「豪農層の教育、特に教員任用に対する見識があった」¹³という。彼らが勸能学校の教員として任用した多くは、各地をわたり歩いていた士族の青年だった。学校世話役たちは、家業の用で東京に赴いた時や漢詩文のサークルや民権運動を通じた豪農間のネットワークの中で教員を探していたという。この事例から、士族の青年の近世までの学習履歴が評価されたといえる。また、教員の任用にあたり、漢詩文のサークルなど近世からあったと推測される学問を介した人的ネットワークがいきっていた。

(3) 近世・近代を通じた学習履歴との関連

近世までの学習履歴を教員の資質能力とする上記の研究と異なり、新旧の学習履歴に着目したのが花井信氏¹⁴である。花井氏は「学制」初期における群馬県の小学校教員の履歴に着目し、近世の学習履歴と近代に新たに習得した学問について明らかにした。花井氏は「新しい教員はそれまでの修業歴そのまま教員になれたわけではないはずである。特に、『学制』下の教育内容が欧米の学であったから、それにふさわしい学びをした者が、新しい教員になれるはずである。彼らの修業の新旧がどのようなものであったのか、旧をどう更新したのか、日本近代教育史にとって、大事な研究課題がある」¹⁵と述べる。結果として、「学制」初期の小学校の教員は、近世において共通して漢学を学んでおり、近代になると洋学(英学)や小学教則、洋算を学んだ。近世の素養だけでは、近代の教員になれなかったことがわかる。「学制」初期の群馬県では、伝習所(前橋町第一番小学校の傍らに設立)という教員養成機関で小学教則が教えられていた。また伝習所の教員は洋学者であった。明治中期になると、教員の近世における学習履歴は問われなくなり、伝習所・師範学校で教員養成が行なわれることになった。

花井氏の研究の意義は、近世・近代を貫く視角にある。花井氏は、近代の教員について、近世の学習履歴を改めて近代に対応した新しい学問を身に付けていったと考える。しかし、そこには前時代である近世の学習履歴が近代にどのように引き継がれたのか、という視点はない。近代の教員は、近世の学習履歴を基盤にして、近代に対応した新しい学問を習得していったということも考えられる。近代に入って10年もたっていない明治初年において、これまで価値をおいてきた近世の学習履歴(特に漢学)を改めて、新しい学問である洋学にきりかえることができたのか、という点について疑問が残る。近世の学問を改めて、近代の学問を習得するのか。それとも近世の学問の上に、近代の

学問を習得するのか。この点については、当該期の教員の学習過程、漢学や洋学という学問に対する意識などがわかる史料を用いて、事例研究を積み重ねる必要がある。

明治初年が、まだ前時代の影響を受けている社会状況を考えると、近世・近代のつながりを視野に入れた研究を行なう意義は大きい。これまでの教育史は、近世教育史と近代教育史というように、時代によって区分されていて、近世から近代に移行する幕末維新期の学習状況についてはほとんど検討されてこなかった。しかし、近世・近代のつながりを視野に入れた研究を行なうことで、近世の学問習得を近代から評価できると同時に、近代の教育や学習のあり方の全体像にせまることができるだろう。

2 明治半ばの私塾師匠の学問習得と教育

近年、教育史の領域で近世から近代を通じた視点で研究を進めているのが山下廉太郎氏¹⁶と池田雅則氏¹⁷である。花井氏の研究が小学校教員を対象にしているのは異なり、山下氏と池田氏は正規の学校ではない私塾の師匠を対象に、明治10年代以降の事例をとりあげている。

山下氏は、明治21年(1888)から大正10年(1921)頃に、愛知県額田郡坂崎村に開かれていた大津裁縫塾を事例としてとりあげた。近世からの伝統的な裁縫教育を受けた師匠は、近世以来の技術に終始せず、門人たちの実情に合わせて教授していく実態を明らかにし、「地域の実情に合わせ、時代により適した方策を摂取し、展開していく」¹⁸と述べた。裁縫塾の師匠がいかにして近代の裁縫技術を習得したのか、という点についてはまだわかっていないが門人に教えていたということから師匠が近代の裁縫技術を身に付けていたことが推測できる。

池田氏は、天保期から明治末期まで存続した新潟県の私塾長善館を事例に、漢学塾であった長善館が、従来からの漢学に加えて、明治18年(1885)に英学・数学を塾のカリキュラムに導入していく過程について検討した。英学導入をめぐる、反対派と賛成派と折衷派にわかれたため、元塾生や塾生の親は協議を重ねた。賛成派が「正則」(会話中心)英語を勧めた理由は、長善館を大学への階梯となる学校に改めるためだった。結果として、「変則」(訳読主体)英語の内容を12歳から17歳の中学校程度の子弟に教えることになった。数学課程は在京の著名な私立学校、中学校や大学予備門と同等の水準をもっていたとされる。長善館で英学を教えた塾主の息子は、遊学して英学を学んだ。息子の日記には、漢学塾を継ぐのは子息として当然であるが、今日の社会状況をみると洋学に頼らずに「家考を起す」ことはできないと考え、洋学を修めるため

に上京したことが記されている¹⁹。

以上より、近世の教育の影響を多大に受けた教育者が近世までの学問や技術に終始せず、地域の要望や社会の変化に応じて、新たな知識を身に付けて塾生に伝達していこうとする姿がみえてくる。「学制」初期の教員についても、近世までの学習履歴と近代で習得する学問を合わせて検討する意義が認められる。

3 「学制」初期の教員の資質能力に関する研究の課題—近世・近代を通じた視点

山下氏、池田氏の研究により、明治半ばの教育者は近世の学習履歴に加えて、近代という社会に適応した新しい学問や知識を身に付けていったという知見が示された。この知見は、教育者が近代に対応するために新しい学問を習得したという点で花井氏の論と重なるものであり、すでに「学制」初期に萌芽としてみられる現象であったことがうかがえる。ここでは、花井氏の『山峽の学校史』の内容を具体的にあげながら、今後、「学制」初期の教員の資質能力を検討していくうえでの課題についてまとめる。

(1) 教員の洋学習得と地域性

花井氏は、「学制」初期の教員について、近世では共通して漢学を学ぶという学習履歴をもち、近代になると洋学(英学)²⁰や小学教則、洋算を学んだことを明らかにした。当該地域に、洋学を普及させようとする意志が伝わってくるのが教員を養成する伝習所の存在である。伝習所の教員9名全員が洋学の学習履歴をもっていた。「『学制』の下で重視されたのが洋算や窮理学」²¹であったため、洋学を学んだ教員を採用すべく群馬県は伝習所を設立したという。群馬県が文部省の方針に対応したという構図はよくわかるのだが、教員の洋学習得に地域の状況は関連しないのか。教員の洋学習得と地域性について、2点を課題としてあげたい。

1つは、教員の洋学習得と地域の人々の要望の有無である。近世において、地域と学問は密接につながっている。手習塾で子どもが学ぶ内容は、その地域で生きていくうえで必要な知識であった。また、学問をする地域の指導者たちは、家業は異なっても学問については同門であることがしばしばみられる。学問は、地域の指導者層を結びつける共通項としての役割を果たしていたと考えられる。一方で、「学制」初期において、教員に新たに求められた洋学と地域との関連はあったのか。明治初年に、現在の愛知県常滑市小鈴谷において、郷学校と尋常小学校で教員生活を始めた溝口幹(1852~1933)という人物がいた。彼が数学やドイツ語を学んだのは明治16年(1883)から19年(1886)のことだった²²。小鈴谷には郡内に、尋常小

学校より上の段階にあたる高等小学校が1校しかなく、小鈴谷からその高等小学校まで通学するのは困難であったために、より高い学びを求める地域の人の要望があり²³、明治21年(1888)に鈴溪義塾²⁴ができた。溝口幹は、学校を退職し、鈴溪義塾の塾長兼訓導となった。明治25年(1892)に塾は高等小学校になり、溝口幹は高等小学校の校長になった。彼の洋学習得と鈴溪義塾・高等小学校教員着任との因果関係は明確ではないが、鈴溪義塾・高等小学校設立の時期と洋学習得の時期を重ねてみると、両者の因果関係が考えられる。群馬県の教員の洋学習得は、文部省の方針に応じる「上からの洋学」だったのか、それとも地域の人々の要望に応えるものだったのか。石戸谷哲夫氏は、明治初期の小学校教員には、政府の文明開化政策を背景にした「開化役割」があった点を指摘する。政府は、治安上と中央集権の徹底をめざし、民衆に布令を徹底させる必要があった。明治初期の学校は、布令伝達所などを兼ねた「多機能な機関」であり、布令類を読める小学教員に伝達役割が期待されていたという²⁵。

「学制」初期の教員の洋学習得、明治半ばの教員溝口幹の洋学習得、石戸谷氏の見解を合わせてみると、「学制」初期は「上からの洋学」で教員に洋学修業を要求し、明治10年をすぎると洋学が人々の間に浸透し、地域から洋学教員に対する要望が出てくるのかもしれない。今後、実態を確認したい。

2つは、「学制」制定までの地域と洋学の関わりの有無である。熊澤恵里子氏は、「学制」制定前における福井藩の近代化の過程をとりあげ、福井藩が洋学導入を率先して受け入れ、「学制」改革にも取り組んでいたことを明らかにした²⁶。「学制」後に、教員が洋学を効果的に習得していくには、その前にある程度の環境が整備されていなくてはならない。そのため、教員の洋学習得は、「学制」前の地域と洋学との関わりについて合わせて検討する必要がある。

地域の洋学に対する関わり方は、伝習所の教員の洋学習得レベルとも関わる可能性がある。群馬県の伝習所の教員は師についたり、大学南校や大学東校、駿州沼津小学校に通ったりするなどして洋学を学んでいるが、これらの師または教員自身のレベルはどのくらいのものだったのか。地域の人々の洋学に対する要望が高いものでなかったら中央(文部省)の政策に対応するために、とりあえず洋学を学んだという履歴をもつ人たちを伝習学校の教員として雇うことになるかもしれない。近代の小学校教員を養成する伝習所の教員の洋学習得のレベルから、新しい知識に対応しようとする地域の態度や要望の高さが読み取れる可能性がある。

(2) 「学制」初期の教員が習得した洋学内容

近世の洋学は、蘭学とよばれ、特に医学の分野で発達した。17世紀前半にはシーボルト事件や蚕社の獄

などがあり、幕府の厳しい統制を受けはしたが、医学、兵学、地理学など実用的な分野を中心に社会に普及していた。幕末になると、幕府は西洋諸国の文化や学術を受け入れ、近代化をはかり、洋学研究は哲学、政治、経済などの分野にも広がっていたという²⁷。田崎哲郎氏は、幕末の洋学について「洋学はなによりも第一に科学であり、技術であった」²⁸と述べるように「庶民的科学」として、医療の領域など社会で活用されると同時に、幕末には幕藩体制の補強的意味も加わったとする²⁹。そして、幕末には指導者層の要望を背景に、洋学(蘭方医学)は地域にもある程度普及していたという³⁰。このような幕末の洋学の状況において、伝習所の教員はどのような内容の洋学の学習履歴をもち、近代の教員になる人たちに何を教えたのか。

花井氏のとりあげた群馬県の事例により、「学制」初期の伝習所の教員は、「学制」制定前後に洋学を学んだことがわかった。伝習所の教員9人の履歴書によると、洋学に関する学習履歴は英学、洋算、医学(「和蘭医学」)、兵学である。彼らは、近世の洋学者に学んだと考えられる。そのため、近世の洋学内容と「学制」初期に必要なとされた洋学内容の異同について検討を要する。まず、彼らの師がどのような洋学の知識をもって、彼らに何を教えたか。次に、彼らは伝習所でどのような内容の洋学を教えたのか、ということである。伝習所の教員がこれまでに学んだ洋学内容を捨選択したうえで、伝習所で教えたとするならば、教えられた洋学の内容が「学制」初期の教員に必要なとされたものである。群馬県の伝習所で教えられた洋学内容がわかる史料は残っておらず、別の地域でみていくことになる。

(3) 近世までに習得した漢学・国学と近代の洋学習得の関係

花井氏は、教員が「学制」前後に習得した洋学と近世までに習得した漢学・国学について「伝習小学校で欧米の学を学び、漢学・国学からの転身を図っている」³¹、「伝習学校の教員は、『小学教則』に則して、自らが『転学』したように、漢学や国学になじんだ思考を改めさせ、洋学的なものの見方、考え方を入学生徒に教えたのであろう」³²と述べる。つまり、近代の小学校教員はこれまでに価値をおいてきた漢学や国学を改めて、洋学を学ぶことがよいとされたと読み取ることができる。しかし、実態として、近代に入ってまもないこの時期に、これまでに学んできた漢学・国学を改めて洋学にきりかえることができるのだろうか。近世までに漢学を学んでいた多くが武士や村役人などの地域の指導者である。近世において漢学は、指導者層に共通する学問であり、国学や洋学を学ぶ前に習得する学問の基盤になっていた³³。漢学習得は、純粋に学問としての習得だけではなく、その人が地域におけ

る指導者であるという立ち位置を示すためにも必要な教養であった。国学については、地域や家業により習得に差があり、漢学のように指導者層に共通して普及していたわけではなかったが、国学が普及した地域においては、学習主体は地域の指導者であることが多かった。このように、近世において、漢学は学問の基盤であり、地域での位置づけを示すものであったのに、近代に入って10年もたたないうちに意識の変化が起こるとは考えにくい³⁴。熊澤氏は日本の教育の近代化が、漢学と国学を切り捨て、洋学を採用する西洋化であったとする定説に疑問をなげかけ、明治4年(1871)の江藤新平の「学校ノ議」の主張をとりあげて「倫理思想は神道に、科学は西洋諸国に学ぼうとするものであり、双方の好ましいところを斟酌する形式を示している」³⁵と述べ、学問は適材適所ですみ分けしていたことを指摘した。「学制」初期のこの段階においては漢学・国学を「改め」洋学を学ぶというより、近世の学問(漢学・国学)の上に洋学を習得するという事ではないだろうか。

漢学・国学と洋学の関係について、他の事例をあげる。福沢諭吉の『学問のすすめ』には、以下のようにある。

「学問とは、ただむづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学をいふにあらず。これらの文学も、おのづから人の心を悦ばしめ、随分調法なるものなれども、古来世間の儒者・和学者などの申すやう、さまであがめ貴むべきものにあらず。古来漢学者に世帯持の上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人もまれなり。これがため心ある町人・百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。無理ならぬことなり。畢竟其学問の実に遠くして日用の間に合はぬ証拠なり。されば今斯る実なき学問は先づ次にし、専ら勤むべきは、人間普通日用に近き実学なり。」³⁶

福沢は、漢学、国学を否定して、洋学を含む実学を薦めた。福沢のいう実学とは、いろは四十七文字、手紙の文言、地理学(日本、世界)、窮理学、歴史、経済学、修身学など実際の生活で役にたつと考えられるもので、これらの学問を習得するために西洋の翻訳書を参考にすると記している³⁷。しかし、実態として、福沢の思想は初めから人々に受け入れられたわけではなかった。木村政伸氏は、明治11年(1878)の福岡県の筑後の農村の人々について、いまだに旧慣習の中にあり、学問のよさを伝えても浸透していなかったとの報告書(学事年報の原稿と推測)を紹介した³⁸。ただし木村氏は、農村の人々について述べたのであり、近世で漢学、国学を学んだ人々(主に武士や地域の指導者)が、近代で洋学をどのように学んだかという点

についてはよくわかっていない。「学制」初期の教員については、近世の漢学や国学の学習履歴が活用できたことは明らかになっているが、近世から近代の移行期における教員の漢学、国学及び洋学習得の内実はよくわかっていない。近世までの学問を改めて新しい学問に「転身をはかる」のか、または近世までの学習履歴のうえに新たな学問を積むのか。この問題については、近世・近代を通じた学問のあり方に関わることであり、地域の学問をとりまく状況なども考慮したうえで検討するべき課題である。

(4) 近世における学問習得の再評価

花井氏によって、近世・近代を通じた教員の学習履歴が明らかになったが、史料の限界もあり、ほとんどの教員の近世での身分や家業がわからない。「学制」初期において、誰が、どのような経緯で教員になったのか。考えられるのは2つの場合である。1つは、職業転換のうえ、教員になった人である。社会の変化により、例えば士族や神職のように近代になり世襲できなくなった結果、教員になったことが考えられる³⁹。2つは、近世以来の私塾の師匠が学校の教員も兼ねることである。どちらの場合にしても近世までの学習履歴は、教員になってもいかにできていた。しかし、前者のように職業転換して教員になった人の場合、別の意味も見いだせる。近世において、家業・地域でついていた「役」と学問内容は、密接に結びついていた⁴⁰。つまり、学問は将来就く家業や「役」のために行なわれていた。「学制」初期、職業転換をして教員になった人は少なくなかったと思われるが、彼らは近世において家業に就くために学んでいたのであって、教員になるために学んでいたわけではなかった。しかし、「学制」初期の教員の学習履歴として、近世に習得した学問、特に漢学が評価されることになった。近世の学習履歴が教員になるうえで転用できたという面で、近世・近代を通じた学問の意味を見いだせる。近世にどのような家業についていた人が、職業転換をして近代の教員になっていくのか。また、その人たちは近世にどのように学んでいたのか。この2点を合わせて検討することで、明治初年の教員の資質能力の生成過程が明らかになると同時に、近世における学問習得について再評価できると考える。

おわりに

「学制」初期の教員の資質能力は、主に教員免許取得と近世までの漢学の学習履歴から論じられてきたが、花井氏の研究により、近世までの漢学の学習履歴だけでなく、近代になり洋学の習得も求められたことが明らかになった。ただし、花井氏は「学制」初期の教員の資質として、洋学が必要になったことを重視してお

り、近世までの学習履歴と近代の洋学習得のつながりについては言及していない。

「学制」初期の教員の資質能力について考える時、彼らが近世・近代を通じて学んでいることから、両時代をつなぐ視点が必要になる。近世の学習履歴と近代で学ぶ学習得である。一方で、先行研究ではほとんど言及されなかった視点がある。それは、教員の学習得をとりまく要素である。教員の資質能力は、学んだ内容と同時に学習をとりまく要素も検討することが必要である。学習は学習だけで成立するのではなく、例えば地域や人的ネットワーク、社会構造の在り方などの学習をとりまく要素があつて成立するものだからである。

今後、事例研究などを通じて具体的に研究を進めていくために、「学制」初期の教員の資質能力に関する課題について、3点にまとめる。

(1) 教員の洋学習得と地域性

「学制」初期の教員の洋学習得は、地域の人々の要望や「学制」制定前の藩の取り組みや地域の洋学普及状況等も合わせてみる必要がある。

(2) 近世から近代への移行期における教員の漢学・国学及び洋学習得の内実

①近世と近代の洋学内容の対照

近世で教員自身または教員の師が学んだ内容と「学制」初期に教員として必要とされた内容と対照する。洋学の内容は語学、兵学、天文学、医学、物理学など多様であるため、教員に必要とされた洋学について検討するために洋学の内容を細かくみる必要がある。

②近世に習得した漢学・国学と近代で習得する洋学の関係

近世の学習履歴である漢学・国学を「改め」て、近代で身に付けた洋学を採るのか、それとも、近世までの学問の上に近代の学問（洋学）を積み上げるのか。日記や書状（手紙）などを題材にして学習得の内実を探りたい。

(3) 近世における学習得の再評価

「学制」初期の教員の中には、明治維新を境に社会構造が変化したことで、従来就くはずだった家業に就くことができなかつた結果、教員になる人達が少なくなかつた⁴⁾。近世において、人々の学習動機は自らの家業や地域で務めていた「役」にあり、将来をみすえて学んでいた。社会の変化により、予定していたものに就くことはかなわなかつたが、彼らが近世までに習得した学習履歴は、近代の教員に必要とされた資質能力として転用することができた。近世に習得した学問内容と「学制」初期の教員に必要とされたものについて対照することなどを通して、近世における学問の再評価を試みたい。

註

¹ 教員に必要な資質能力について、2006年7月11日の「今後の教員養成、免許制度の在り方」（中央教育審議会答申）には、「教員には、新しい学習指導要領に対応した資質能力が不可避免的に求められている。また、例えば子どもの学ぶ意欲や学力・体力・気力の低下、様々な実体験の減少に伴う社会性やコミュニケーション能力の低下、いじめや不登校等の学校不適応の増加、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）や高機能自閉症等の子どもへの適切な支援といった新たな課題の発生等、学校教育をめぐる状況は大きく変化しており、教員免許取得後も、教員として必要な資質能力は常に変化している」とある。この答申について、著者は（松尾由希子「講師の意識と受講者ニーズの分析にみる教員免許状更新講習の意義と課題」『静岡大学大学教育研究』6、静岡大学大学教育センター、2010年、53頁）、「教員にはこれまで以上に、子どもをとりまく環境を知ったうえで児童生徒に対応し、発達障害に関する知識や対応を知るなど、新しい技能や知識を取得し、時代の変化に合わせて知識技能を『刷新』（リニューアル）していくことが求められている」とまとめた。

² 花井信『山峡の学校史』川島書店、2011年、第一部「山峡の学校史」第一章「教員の洋学修業」。

³ 第40章（小学）「小学校教員ハ男女ヲ論セス年齢ニ〇歳以上ニシテ師範学校卒業免状或ハ中学位ヲ得シモノニ非サレハ其ノ任ニ当ルコトヲ許サス」とあり、小学校教員の学歴として師範学校または中学を卒業する必要があつた。

⁴ 陣内靖彦氏（『日本の教育社会—歴史社会学の視野』東洋館出版社、1988年、94頁）は、明治前半期の教員の実態について、教員全体にしめる有資格教員の数がかきわめて少数だったことを指摘している。新潟県の場合、1879年において有資格の教員は1割にすぎず、1882年で2割、1890年でも4割であり、有資格の正教員が半数を超えるのは明治20年代も半ば過ぎだったという。

⁵ 同上書、92～93頁。

⁶ 中学校を卒業することで、初等教員資格を得られる。

⁷ 牧昌見『日本教員資格制度史研究』風間書房、1971年、第1章「初等教員資格制度の創設」第1節「『学制』期における初等教員資格制度」、第5章「中等教員資格制度の発達」第1節「中等教員資格制度の創始」。

⁸ 仲新、伊藤敏行、久原甫、内田紘、浅見弘、鈴木正幸「東海地方における近代学校の発達—愛知県教員履歴書調査報告」『名古屋大学教育学部紀要』第10巻、名古屋大学教育学部、1963年、53頁。

- 9 近世の学習履歴による履修の時期は、江戸時代より明治 9 年までを取扱い、特に明治 6 年までを主要な対象としている。
- 10 前掲註 8、53 頁。
- 11 同上論文、5 頁。
- 12 石戸谷哲夫、門脇厚司編『日本教員社会史研究』亜紀書房、1981 年、第二章「小学校創設期における教員社会」。
- 13 同上書、62 頁。
- 14 前掲註 2。
- 15 同上書、3 頁。
- 16 山下廉太郎「大津裁縫塾における近代的教授法と洋服縫製技術の摂取」加藤詔士、吉川卓治編『西洋世界と日本の近代化—教育文化交流史研究』大学教育出版、2010 年。
- 17 池田雅則「遊学者の日記にみる明治 10 年代の学習遍歴とアーティキュレーション」『中等教育史研究』第 16 号、中等教育史研究会、2009 年。同上「1880 年代半ばにおける農村の私塾—新潟県西蒲原郡長善館における教則改訂をめぐって—」『日本の教育史学教育史学会紀要』第 53 集、教育史学会、2010 年。
- 18 前掲註 16、189 頁。
- 19 前掲註 17「遊学者の日記にみる明治 10 年代の学習遍歴とアーティキュレーション」、66 頁。
- 20 洋学の内容は多様であるため、内容が判明するものについては、「洋学」のあとの括弧内に内容を記す。
- 21 前掲註 16、16 頁。
- 22 『溝口先生頌徳記念』1908 年、35 頁。
- 23 永田文夫『鈴溪義塾と溝口幹—付鈴溪ゆかりの史跡解説』2010 年、8~9 頁、32 頁。
- 24 同上書 (8 頁) によると、私立の高等小学校との説明がある。
- 25 石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社、1967 年、33~39 頁。
- 26 熊澤恵里子『幕末維新时期における教育の近代化に関する研究—近代学校教育の生成過程—』風間書房、2007 年。
- 27 大石学『江戸の教育力—近代日本の知的基盤』東京学芸大学出版会、2007 年、66~70 頁。
- 28 田崎哲郎『地方知識人の形成』名著出版、1990 年、260 頁。
- 29 同上書、269 頁。
- 30 この点について、田崎氏は「よりよき医療としての蘭方医学への、地域社会の、なかでも村落指導者層である上層農民階層の要望を強く受けていたというべきであろう」(同上書、270 頁)と述べる。
- 31 前掲註 2、22 頁。
- 32 同上書、25 頁。
- 33 例えば、尾張国の庄屋服部家 9 代續 (1815~1873) は、後に国学者の門人になり、国学を熱心に学んだ人物であるが、幼少の時は日々漢学書を読み、学んでいた (松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成—海西郡荷之上服部家の蔵書と読書の分析」岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究 第三篇』清文堂出版、2007 年)。同『江戸上層庶民の家の蔵書に関する研究—学習環境の視点から』(博士論文)、2008 年、187~188 頁。
- 34 尾藤正英氏は、幕末維新时期の社会構造について、「明治維新前と維新後とで、西洋文明が入ってきたという点では非常に変わるが、社会の実際の組織はほとんど変わらない」(『江戸時代とは何か』岩波書店、1992 年、14 頁)、「上層部でも下層部でも明治維新によって、変わった面と変わらない面がある。変わらない面は大きい」(同上書、16 頁)と述べる。江戸時代と明治時代は、政治主体が入れ替わるという行政上では大きな変化であった。しかし、人々の暮らし方や意識に関して、明治初期の段階では江戸時代と変わらない面も多分にあったと考えられる。ただし、尾藤氏も述べるように、西洋文明が入ってきたことは大きな変化であり、洋学もその一つである。漢学・国学と洋学に対する人々の意識については、慎重に事例をみていく必要がある。
- 35 前掲註 26、4~5 頁。
- 36 福沢諭吉、伊藤正雄校注『学問のすゝめ』講談社、2006 年、19~20 頁。
- 37 同上書、20 頁。
- 38 木村政伸『近世地域教育史の研究』思文閣出版、2006 年、38~43 頁。
- 39 松尾由希子「明治初年御師の継嗣における読書の意味—伊勢国溝口幹『日乗』の分析より—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第 52 巻 2 号、2006 年。本論文でとりあげた溝口幹は、江戸時代に伊勢神宮の御師をしていた父親のあとをつぐために、元服前から家業を手伝い学問に励んでいた。しかし、明治 4 年 (1871) に神職の世襲制が廃止になったことにより、将来の職を失った。その後、檀家だった尾州小鈴谷村 (現愛知県常滑市小鈴谷) 在住の盛田家の誘いにより、明治 5 年より同地域で教員生活を始めた。
- 40 これまで近世の漢学は、指導者層の学問であり、同階層間のつながりを強化するためのつきあいの学問であるといわれてきた。木村政伸氏 (前掲註 38、第 6 章) は、近世の福岡の農村 (浮羽地域) を事例にして、村役人層にとっての漢学の意味について検討した。村役人層は、一般農民に対して優越性を示すために俳諧や漢学・漢詩を使ったという。

⁴¹ 近代に入り、世襲できなくなった例として士族があげられる。例えば、門脇厚司氏（『東京教員生活史研究』学文社、2004年、65～66頁）は、「学制」に沿って新しく開設された小学校教員の多くは、当初士族出身であったと述べる。しかし、このような状況は時代が下るにつれ、次第に平民の教師が増えていったという。

[付記]

本研究は、学術研究助成基金助成金（若手研究（B））「近世・近代移行期の職業転換にみる近世の学問の意義と展開」（課題番号 23730740）の助成を受けたものである